

オープンミーティング

日時 2022年9月3日の15:00~16:30

テーマ 「ICPIC 2020 in Tokyo」でのシンポジウム『P4Cで変わる日本の教師』を振り返って」第1弾

提題者 辻明典 福島県公立小学校教諭
金澤正治 兵庫県公立小学校教諭、

司会 森本和夫 大阪府公立小学校教諭

参加者 11名

発表

辻明典

福島市内の小学校の4年生の担任。中学校に3年、特別支援学校中等部・高等部に5年間勤めていた。

P4Cは大阪での大学院生時代に関りを持つようになった。P4Cとはどういうものか理解しないままに、今日の発表をされる金澤先生の授業などを見学。東日本大震災後に被害の大きかった地元に戻って、中学校の教師となった。辛い経験をした子どもたちと関わるの中で、どうしたら子どもの声を聴けるのか、考え始めた。

「頑張ろう、日本」と前向きな言葉はたくさんあったが、子どもたちの率直な声を聴いて行きたいと思った。これに対する批判や叱責もあった。しかし、子どもの声を少しずつ聴いていくうちに、「何のために生きているのかな」、「何のために存在しているのかな」とかビクブルするような発言を聞くようになった。このようなことについて授業で話してみたいとか、休み時間に話してくれたりするようになっていく。身近に亡くなった人がいる中で対話することによって、そのような状況に対して自分で向き合うようになっていった。そういう時間を作ることが出来たのではないかと思うようになってきた。大人も向き合うことが難しいし、現在進行している出来事に子どもが向き合っている。そのために対話が役に立っている。その後、子どもたちから、「ボールを作ったよな」、「結構楽しかったよな」、「話し合いをまたやりたいな」というようなことを言ってきてくれた。

その後、特別支援学校に勤務することになった。当初、P4Cはもうできないだろうなと思った。なぜなら、障害の重い子たちと対話はできないだろうという思いがどこかにあったから。しかし、そのようなことはなかった。最初に入ったクラスで、すでに、子どもは何かを伝えようとしているなという感覚にとらわれた。目線や表情、雰囲気ですることが分る。言葉で表現はできなくても、色々な力を駆使して伝えようとしている。障害の程度に関係なく、自分の伝えたいことを伝えようとしているのは、他の子どもと変わらない。何か言いたそうだなとか、何か我慢しているんだなということはすごく伝わってきた。これまでやってきたP4Cの授業と同じだと思った。子どもたちから伝わってくるものと実感した。

例えば、円になって話すこともあったが、当然、その時間には座ってられない。ボールを回そうと思っても、ボールが投げられないので、持って歩き出すとか、大声を出すとか、といったことがあっても、楽しそうにやり取りをしている。伝えたいということがよく分かる。何か伝えられた、分かってもらえたという時は、体を動かして自分の思いを伝えている。また、顔が明るくなったりする。

こちらが信じて、待ってあげたり、何回も促したりしているうちに、子どもの可能性が広がっていくのを実感する。そのような状況で、言葉が出てくるとか、伝えられる様になったりとか、家族と初めて話すことができるようになったりとかしてくる。P4C を通して、子どもたちが出しているサインを掴むことができるような力を自分が持っているのだということを教えてもらった。看護師さんと話す機会があったとき、このような感覚は、看護師さんの持っている感覚と似ているのかもしれないと感じた。というのは、看護師さんは患者の状態を早めにキャッチしていく力があると思うが、そういう感覚と似ているのではないかと感じる。

今は通常のクラスで、対話の時間をほぼ毎日作るようにしているが、その過程で、子どもが少しずつ友だちの話を聴けるようになっていくし、通常の授業でもけんかしなくなったねとか、話を聴くようになったねとか、落ち着いたねとか、そういう発言が出るようになった。子ども自身が相手の反応をキャッチして返すというような力を持っている。このようなことを子どもから毎日教えてもらっている。

Q&A&C

Q：特別支援の子どもやクラスになかなか参加できない子どもがいる。対話する時の具体的なアプローチの仕方とか、普段の接し方をもう少し聞いてみたい。

A：色々な態度を取る子どもがいるが、周囲がそれでいいと受け入れることができるような雰囲気を作るようにしている。

C：特別支援の学校での経験があるので、そのような子を受け入れる土壌があると思う。このような土壌が大切なのではないか。しっかり座って、じっとして、というようなことを言いがちだが、子どもにはそうせざるを得ない事情もあるので、それを受け入れるような態度が自分にもできるようになってきている。そのような雰囲気をやはり作るようにしている。教師が受け入れてあげることがあれば、子どもも自分たちなりにそのような態度を作っていく。話せない子や不安な子は自分の隣に座ってもらって、一年間過ごすうちに、その子は話を聴くようになってきて、少し楽しそうな様子を見せるようになってきた。

C：うるさいとはっきり叱る場面もある。子どもには様々な背景があり、そのような背景を背負っていきっている。なかなかそれを学校では表現できないが、P4C の時にはそれを吐き出す時がある。それは他の人に聞いて欲しいということなのだと思う。そのような場所

が欲しいのだと思う。そのような子は何かを訴えようとしているのが分かる。

Q：騒ぐような子が出た場合、他の子たちはどうしているのか。また、「受け入れる」ということが出てきたが、それをもう少し説明してもらいたい。

A：「受け入れるということ」。教師には、教えなければいけないとか、何々させなければいけないとかという感覚がついて回るし、学級を維持していかなければいけない、管理していかなければいけないという気持ちがある。それに対しては指導していかなければいけないという側面があって、そのような構えで過ごしているので、P4C をやるときは、なるべくその構えを外して、受け入れていくという態度を取る。受け入れるということは子どもが教師の態度で分かっていくものではないか。

Q：身体性の問題や、構えを外すということは大変興味ある内容でした。

金澤正治

兵庫県の小学校教員として36年、来年退職。教育実践を自由にさせてもらえる環境の中で、P4C をした来た。管理職や同僚の先生の理解があった。P4C を実践する過程で様々な人との出会いがあった。

初めて P4C をしたのは、2006 年くらいに、絵本「ともだちや」を使った授業でした。この頃はまだコミュニティボールは知らなかった。阪大のほんまさんと絵本を見て授業をした。授業の展開は、教師が「ともだちや」のプリントを配って、それを読み終わった後、そのプリントは子どもの机の中にしまって、プリントを見ないで話をするものだった。最初はエツと思って、それで45分できるのかととまどった。通常45分もこういうことをすると、シーンとなって、話しが続かなかったらどうしようと思って、授業が成立しないんじゃないかという思いがあった。教師は通常細かいステップを踏んで授業を展開するので、実際授業がどうなるかと思っていたが、子どもはよく発表をしてくれた。このことにはすごく驚いた。聴き方の努力は普通の授業の中でやってきたので、聴いてくれる先生には、子どもは話しえてくれるという感覚があった。聴き方ということは丁寧に実施してきたことのお陰で授業は何とかうまくいった。

授業後の反省で、ほんまさんは授業中にもっと子どもの発言にピンを立てて、それについてもっと話し合えばよかったとアドバイスを受けた。この頃から、授業は指導するのではなくて、支援する者であるという考えが広まり、それに伴って、ファシリテーターという言葉も広がりつつあった。当時はそれだけと思ったが、今ではなるほどと思うようになった。話しを焦点化することができるということが、ファシリテーターには大切だと思う。

このようなことが分るようになったのは、P4C の同僚といろいろ議論を重ね、授業の発言記録を取ってもらい、それを見て、ファシリテーターをしていく上でツボとなるようなことに気がつき始めた。

そのあと P4C の教員集会をしたけれど、P4C 授業に同僚は驚いていたようである。自分

にはそんな授業はできないなという拒否感の方が強かった。当時は、自分にもよく分からないことが多くて、言葉で同僚に説明できなかった。しかし、発言記録を振り返ってみると、子どもはただ発言しているだけでなく、対話して思考していたことがよく分かる。実際の授業ではそれを聞き取る力が教師にはない、というか、一方的に教えるスキルはあるが、自分の学ばせたいことを、効率的に学ばせるというスキルに関して言うと、小学校教師はなかなか優れたスキルはあると思うが、子どもたちが話している内容とか、それを追って、それについて評価するということは、やり慣れていないし、実際話し合う授業というものが存在していなかった、ということの方が大きいかもしれない。

それでもやはり、P4Cの授業のやり方は周りの先生に理解してもらえなかった。自分のP4Cの活動をうまく言語化して説明できなかった。よく言われたのは、先生は聞いているだけやんということ。発問も、何か書かせたりもしない。授業的なスキルというものがそこには存在しない。何をしているのか理解するのが難しかったのだと思う。

そういうこともあり、その後、ほんま先生とP4Cの様々な実践にチャレンジ。

フランスのオスカル・ブニフィエの相互問答法。

オーストラリアのビューランダ小学校のフラフープの授業。「リアルリアルでないか」。理由を語る授業。

大谷美術館で抽象画から対話する授業。

とてもよい取り組みができた。3年くらいは、ほんま先生を迎えて学校全体で実施していた。しかし、同僚の先生方に理解してもらえず、もっと、普通の教科の授業の研修がしたいという同僚の先生の思いもあり、全校的なP4Cの実践研究は頓挫。

それからは、個人的にP4Cの授業を続ける。

この後、ほんま先生にハワイのP4Cを紹介してもらう。輪になって、コミュニティボールを使ったP4Cをするようになった。

総合的な学習の時間、特別活動、社会等の教科で子ども達とコミュニティボールを回し、様々な対話をしてきた。現在は道徳を中心に行っている。

退職を目の前にした私は、これまで私がほんま先生や榊形先生に受けてきた支援を他の教師にしていくことがP4Cを広めることになり、自分の務めではないかと思っている。点でしかなかった私が今共にシンポジウムをしているメンバーと線となりました。面となるには、公立学校で周りの先生を巻き込んでいかないといけない。

現在勤めている学校で、今年、主幹教諭として若い先生方の研修をするグループに関わることになり、4月から輪になってコミュニティボールを回して対話をしている。7月25日には、みんなまで対話したい問いを出しあって、対話することにした。ハワイのp4cのプレーンバナナという手法でP4Cをした。問いなんて考えられるのかなと心配していたら、15の問いが出てきた。そこから3つを選んで挙手をしてもらって一番多い問いについて対話することにした。すると「先生を続ける？」という問いが選ばれた。この問いが選ばれたのは、退職前の私にとっては驚きでした。

2学期になって、2つのクラスが、コミュニティボールを自分たちで作って授業をするようになった。自分からP4Cをしたいという先生が出てきたのはうれしかった。

Q&A

C：何をやっているのか分からない、止めてくれと校長から言われたこともあった。

C：ソーシャルスキルトレーニングを学校の相談室で行っている。P4Cは有効ではないかと考えた。相談室にくる子の間ではP4Cのルールは守られて、対話が弾む、しかし教室に戻るとその子たちも発言しなくなる。そういう中でどういう対応が可能か勉強になりました。

Q：相互問答法で、一人の子にみんなが質問するというのですが、どういう感じだったのかももう少し詳しく教えて欲しい。

A：個人的な家庭事情に合った子が、みんなと話をしたいということで、一人で皆の質問を受けて答える。その子には自分の内に主張があった。そのような子が中にはいる。自分の個人的な事をそのまま語るのではなく、そこから切り離して、みんなが共有できるように言葉を選んで話している。大人ですらなかなかできないことをしている。他の子もそれを受けとめている。

C：クラスの人数が30名を超えると、寛容の度合いが減るような感じがする。

C：実際、40人のクラスも20-25人のクラスも経験したが、後者の場合だと本当にやりやすい。P4Cは全員円を作って対話をするということが理解されていないのではないかと。話し合いというと一般にグループ活動がイメージされやすいが、P4Cはそういうのとは違う。全員で話をするから意味があると思っている。人数が少ないグループだと話す機会は多くなるが、話している人の発言を聞く機会は少なくなる。質問するような姿勢で聴くことが大切だと思う。P4Cの活動を通じて、教師としての自分の聴く力がました。

Q：P4Cを通じて、自分の何が変わったと思うか。自分が変わらないとP4Cは続けられないと思う。

辻：基本は変わっていない気がする。以前よりも子どものことを信じてあげられるようになった気はする。とことん信じれば、人は変わるということを教えられた。このようなことがあって、P4Cを続けられるのかなって思っています。

C：この子はこういうものだという先入見からなかなか抜け出せない。しかし、P4Cをするとそれが変わると思う。

金澤：辻さんの言うとおりでと思う。僕も同じような体験をしてきた。辻さんの経歴は少し違う。僕は最初から教師になろうと思ってやってきたので、どちらかというと支配力の方が強かった。管理するとか。そういう状況から、辻さんのように落ち着いて子どもの話を聴くことができるようになったとは思っている。年齢を重ねてきたということもあるかもしれないが、子どものことを信じてあげられるようになった。やはり、子どもには色々な背景が

あるんだということに気付けるようになった。子どもには色々教えられることが多かった。

Q：教師ではなく、子どもの方が P4C をすることによって、どう変わったかという事例があれば、挙げてほしい。出来たら、なぜそのような事例を挙げたかも含めて行ってほしい。

A1：落ち着きのない子だったと言われていたが、現在はそのようなことはなくなった。周りの子が聴いてくれるということが影響しているのかな。表情が穏やかになったということに気がついた。子どもが非常に落ち着いて、周りの人がビックリした。

A2：皆に聴いてもらうという経験が大きいのではないか。家庭でも学校でも聴いてもらえる環境がない中で、聴いてもらえるという経験が影響している。自分の話を聴いてもらえる人がいるんだということ P4C によって体験している。このような体験が子どもを変えていくのかなと思う。

A1：批判的思考を深めるということもそうかもしれないが、話しをシンプルに聴いてあげることが大事だなと思う。一生忘れられないだろうなという子どもの言葉があって、今迄誰ともしゃべれなくて、心の中で自分にしゃべっていた、ということを知った時、人は一人では生きていけないんだと思ったし、どれくらい寂しかったんだろうなと思った。辛い時には、心の中の自分に語りかけるというように、話を聴いてくれる人が欲しいだなと感じた。聞くということは、シンプルだけど、シンプルだからこそ大事なのだと思う。